

義太夫

義太夫協会々報
第35号
昭和60年8月20日
社団法人 義太夫協会発行
〒104 東京都中央区銀座
6-18-2 新橋演舞場B2
TEL (541) 5471

納涼

面白ゼミナール・義太夫版

義太夫協会会長 吉川 英史

残暑御見舞申し上げます。連日熱帯夜が続く猛暑でございますが、ご機嫌いかがお過ごしでしょうか。今回は、堅苦しい巻頭言は抜きにいたしまして、前半は義太夫を扱った川柳の面白いものを紹介し、後半は川柳を問題にした「義太夫クイズ」です。「面白ゼミナール・義太夫版」といったところです。

義太夫節くらい力のいる音楽はございませぬ。酷暑の候ともなれば、全身汗だくでしょう。まして冷房のない江戸時代です。御簾内は客席から見えないので、玉だれの 内に太夫は まっばだか

という川柳があります。実際にそんなことがあったかどうか、保証の限りではありませんがこの句を漫画にしたような古画を見たことがあります。

この句は、謡曲「鸚鵡小町」の中の歌雲の上は ありし昔に 変はらねど

見し玉だれの 内ぞゆかしき
をふまえた作であるところに、値打ちがあります。

暑さや大汗では、三味線弾きの方の川柳もありますので、御紹介しましょう。

大汗になって 才治が 車弾き
文政頃に活躍した鶴澤才治が、「菅原伝授

手習鑑」の「車曳の段」を熱演したことを川柳化したものです。車を曳く汗と「車曳」を弾く汗とが、掛言葉・縁語になっているところが味噌ですね。

汗のあとは風呂といきましょう。

てんでんに 浄瑠璃洗う 風呂の中

この「てんでん」は各人めいめいという意味に、義太夫三味線の音を象徴する「でんでん」を掛けたものです。風呂に入るといい気持ちになってうなり出す。カラオケ時代と違って義太夫流行時代ですから、うなるのは浄瑠璃（義太夫の代名詞）でした。「浄瑠璃洗う」とは、「浄瑠璃」を「瑠璃の玉」に見立てる意味と、浄瑠璃を語っている人が湯の中で体を洗う意味に掛けているのです。

いづれこの連中は素人義太夫ですが、風呂で語るのには、義太夫節ばかりではありません。宝暦時代の川柳ですから、まだ豊後節が一番新しい浄瑠璃で、当時浄瑠璃の品位を服装になぞらえた狂歌風の落首がありました。

(2頁に続く)



ごあいさつ

義太夫節保存会会長

豊澤 仙廣

義太夫協会の皆様様、この暑さを如何にお過ごしかとお案じ申し上げ、御無事をお祈り申し上げます。

家族のすすめで七月中旬より箱根に来て元気に暮しておりますが、八月の本牧亭勉強会には帰京し、若人の上達ぶりを聞くのを楽しみにして居ります。

九月二十日に三生さんの追善会を致しますが、この道に長くつとめて下された御礼の会です。過日の追善会（三生会主催・大日本素義会後援）には沢山の出演で賑やか、あの世で三生さん、さぞ喜ばれた事と存じます。九月は昔からの仲間の出演ですから、皆様お誘い合わされて、三生追善会を賑やかに御後援下さいませよう、よろしくお願ひ申し上げます。



(当世芝居気質より)

土佐袴 外記袴 半太羽織に義太股引
豊後可愛や 丸裸
これをもじって作ったのが、次の二句、
湯屋で語れば 義太夫も 丸はだか
もも引も 羽織も出る 風呂の内
素人義太夫は自宅の部屋をかた付けて会場にしましたが、床は床の間でなく、押入れの上段であったように、川柳は書いています。
押入れを 床に用ゆる 安ざらぬ
夜着と 入れかわって義太夫うなるなり
サービスには、茶飯を馳走したようので——
茶飯をたきながら 押入片付ける

さて、これから義太夫クイズを出します。
【問題】次の川柳は、義太夫節の何の何段に關係がありますか。
(一) 嗅ぎに来た、犬にいわしを くらわせる
(二) お袋を おどす道具は 遠い国
(三) 御無用で 笛と刀の 手がゆるみ
(四) 廢物の 仇を刃物で 返す下女
(五) 君へ忠 親へは孝の 喰った菓子
【回答方法】官製はがきに、番号・曲名・段の名、住所・郵便番号・氏名を書き、義太夫協会事務所宛に送付のこと。締切は九月末日。

【記念品進呈】正解者2名に記念品を進呈します。（正解者多数の時は、抽選）。
【発表】次号「義太夫協会会報」誌上。

鶴澤三生追善会

新盆も済んで、間もなく三生師の一周忌を迎えようとしています。譬え舞台には出なくとも、譬え稽古はつげなくとも、その存在にこれほど大きな力があつたとは——亡くなられて泌々と三生師の偉大さを思うこの頃です。9月29日の命日を前に、9月20日、本牧亭にて追善会を催します。太功記・紙治・日蓮記・廿四孝、総掛合にて師を偲びたいと思います。お誘い合せお出かけ下さいませよう。追善会を控え、本号にても追悼の意を表させて頂きました。

追悼 鶴澤三生師

— 三生師と義太夫教室 —

常務理事 竹本 弥乃 太夫

焦土と化した東京も、戦後の復興によって人々の間にはやっと、落着きを取戻した生活が始まっていた。その中で、義太夫教室が開講された。昭和二十三年のことである。

当時は、義太夫の好きな若者など、現在とは比較にならない程、あまり見かけなかった。

東劇で文楽が掛っても、客席は閑古鳥が啼いていた。そして若者の姿は少く、大半がお年寄だった。だから此の教室も私を含め、辛うじて五人の生徒しかいなかったの、それは大変貴重に扱われたし、世間からも奇異な目で見られ、珍しがられ、新聞社からの取材も多かった。そして、生徒より先生や講師の数の方が多く、何かお祭り気分のような感じがしないでもなかった。考えてみると、戦争は

日本古来の歌舞伎や文楽を始め、凡ゆる芸能を閉ざしてしまつたが、戦後の復興と共に、義太夫などは急速に芽を吹出して、浅草の東橋亭には、いち早く女義復活の看板が出たり、都内の随所には、素人の義太夫会が催されはじめた。そうした最中の義太夫教室だったから、関係者が喜んだのも当然であった。若者に入気のない教室ではあったが、とにかく、第一期が開講され、実技の先生は鶴澤三生師と豊澤猿幸師であった。当時両師は、女義の

花形で、以来女義の世界を盛り立て、今日の隆盛へとつないだ功労者となつた。二人が相寄るところ、技芸に火花を散らした双壁で、人気も又抜群であった。三生師は私を特に可愛がってくれた。私とは六歳下だが息子さんが一人いるので、きっと私にも息子のような気持で面倒をみてくれたのだろう。私も又それなりに甘えた。時には息子になり変り、役所へ住宅の手続きに行つたこともあった。

義太夫教室は、年々生徒を募集した。第一期に始まり、第十期位迄の間に、せいぜい合せて十人足らずの生徒しか集まらなかったが、彼らは皆義太夫に情熱を燃やしていた。それは三生師が、非常に家庭的であり又、温かみのある方だから、教室の生徒が皆慕つたからに他ならない。素義の会の切は掛合物がよく出るが、決して教室生徒が応援に狩出された。三味線は殆んど三生師であった。中でも私は教室から只一人のプロだから、どんな端役でも喜んで出演させて貰つた。年々何人かの生徒が脱めて行つたが、遂に私は此の道で生活するようになってしまった。昭和二十六年、私が故湊太夫さん達と新しく太夫になり、披露公演をした時は、此れ迄になく厳しい指導で『浜松』を語つたが、一生忘れぬ。

太棹もその時から始めた。三生師はいつも私に、「此れを覚えておきなさい」と時ある毎に細まめに朱を書いてくれた。手ほどきを受け、朱の読み書きを習えたのも師のお蔭である。現在義太夫教室は、義太夫協会の事業として協会に委ねられたが、私が毎年三味線の手ほどきを担当する度に、初心の時が思い出されるのである。

本郷の妻恋町、粋きな町名だ。逆ろの文句じゃないが、妻恋う鹿ならぬ我々がよく伺つた師匠の家があつた所だ。今年になって、湯島へ梅見の帰り、久方ぶりに妻恋神社にお詣りした。辺りはビルが林立していて、神田明神の裏手の屋根も隠れてしまい、昔の風情はなくなつてしまった。教室が始まつた頃、まだ師匠のお母さんも御健在だったが、紋教さんや小津賀さん其他多せいの先輩達が入りしていた。いつだったか、「お師匠さん、長生きして下さいね」と言つたら、「あたしが白髪のおばあさんになったら、手を引いてくれる？」「えゝ勿論ですよ」「でも、まだまだ先の事だからねえ」。笑いながら話したことも、つい此間のようだが、数えてみたら、三十有余年、時は容赦なく過ぎ去つて行つた。本郷から今の神奈川へ移られ、御無沙汰ばかりが続き、御見舞も出来ぬまま遂に、遠い国へ旅立たれてしまった。併し、幸い駒之助さんという立派な、斯界の今後を背負つて立たれる後継者がいることは、何よりも心強いことである。永遠に安かれと、心から三生師の御冥福を祈つて止まない。

三生師のおもいで



昭和57年11月20日 本牧亭
佐藤公夫氏撮影

私が三生師にお世話になったのは、オリソニックの翌年四十年の春、私が定年退職のすぐ後でした。当時の稽古場には、亡き聚楽の社長、小林隅斗、楠窪一声、為広 薫、福安瓢登、の亡き方々、現存者は広瀬楠勝様だけと思いません。場所は妻恋坂の御自宅で結構な場所でした。五十三年頃でしたか、神奈川県に新築移転されました。私共は稽古場を失い無理に小林新吉様宅にお願ひし、次の場所の見つかるまでの約束で御厚意に甘えさせて頂きました。が、さて高齢の師の通勤、朝夕小田急、地下鉄の混雑ほんとうにお気の毒で、つらい、せつないお稽古でした。

新しい新宿の稽古場へ移り、一人で御不自由の点もありました。しょうが、何より精神的にも体力的にも余裕が出来、暇さえあれば朝は読経、昼の誰れも見えぬ時は写経、と何冊もノートに書かれておられました。放送などの時には広告の裏紙に台本より写し、それに朱を入れ勉強された儉約家でもありました。みんなの知らない義太夫も、数々皆さんに覚えてほしい、とよく申されておりました。

師は勉強家で暇さえあれば本を読み、夜はスタンドで更け行く時を惜しまれたとか。そんな無理が目の手術にまで及んだことでしょう。片方だけで退院されていたら、あるいは稽古も出来、「今一度舞台で弾きたかった」の念もうすらいだことでありました。しょうが、残念でした。

師はとても体を大事になさいました。医療器、浄水器、栄養剤は何でも、よいと言われればすぐ求めます。ある日、好きでない灸を全身に据えてもらい、とても楽になったと喜んでいました。このお弟子さんは、厚情と親切心でやって下されたんでしょう。私など一度も心から師の喜ぶようなことなどいたしませんで、反省させられました。今もその方を尊敬しております。師は洗濯が好きで、大きい物以外は自分でやられていました。今でも干し物が目に浮かびます。

お稽古のことですが、妻恋の御自宅頃は春駒師が語り、三生師が弾いてお二人が、り、もったいないぜいたくな稽古でした。その頃もっと勉強しておりましたらと後悔しております。

ます。

師はとても深厚心の強い方で、昔よく浮浪者にお恵みをされておりました。ある日私にお金を渡し、これ上げてと言われ私が出しましたら、おれは乞食ではないなどと怒られたことがありました。想い出はつきません。

師は御信心の深い方で、殊更日蓮様の御信仰が深く、よく口ずさんでおられましたこと。鳥と虫とはなけども涙おちず日蓮はなかねど涙ひまなし人の寿命は無常なり人久しといえども百年には過ぎず其の間の事は但一睡の夢ぞかし

おしみてもおしみても
なお余りある御師の御恩

上原 操 (賛助会員)

この度鶴澤三生師の追悼文を書かせて頂きました。有難く御礼申上ります。僅か二年半という短い期間でございましたが御指導頂きました事は決して忘れることなく私の一生の師として命に焼きつけられて居ります。

お稽古の時見台の前にきりりと座しておられた時の師匠、又舞台の上での御立派な御姿、お稽古の後おこたをかこみ、しけるといけないとおこたの中にしまってあったおせんべいを御馳走になつたつるぎの一時、唯々懐しく思い出す度に胸が一ぱいでございます。

お稽古は時間を忘れてわかるまで御指導下さいました。先づ舞台の幕が上りチョンチョン……と柝の音、それからかまえてゆっくりおくりを弾き出す、今でも先生のチョンチョン……とおっしゃっている御声を思い出します。始めはなんでこんな事からやるのか、早く三味線をひき度い等と思いましたが、後になって幕があく時から音楽はすでに始まっている事に気がつきました。先生の真面目で繊細かつ広々としたお心はそのまゝ芸の上に表現され、誠に芸は人なりの感を深く致して居ります。本田劇場で演奏されました酒屋の土佐広師と共に何十年間磨き抜かれたダイヤモンドの様な輝きを私は決して決して忘れる事は出来ません。あの時の場内は演奏家と観客が共に心と心が結び合い誠に芸術の極地を思わせるものでございました。

病床の中より時々皆にお電話下さいまして、今も何か先生からお電話がかゝる様な気がして居ります。私の将来も心配して下さい頑張って勉強する様、度々お電話を下さいました。人間というものは必ず三世の生命で来世もあると信じて居ります。先生はきっともう生れ変わり又芸術家として人々に楽しみや慰め、又明日への希望をあたえる素晴らしい人生をどこかで歩み始めて居られるにちがひありません。本当に先生有難うございました。心から御礼申上ます。

野澤錦輝 (理事)

市川猿之助歌舞伎

渡欧公演に参加して

この度の猿之助歌舞伎ヨーロッパ公演は、「義経千本桜」の半通し、四時間十分という異例の組立の為、竹本も三挺三枚、六人が参加致しました。場割は、竹本幹太夫・鶴澤泰二郎が鳥居前・四ノ切端場・奥庭、竹本綾太夫・豊澤重松が渡海屋前・四ノ切、竹本綾太夫・豊澤時若が渡海屋後・船矢倉・大物浦で、イタリアのポローニヤ公演のみは、全員で吉野山道行を演じました。

四月二十八日成田を出、六月二十五日帰着の約二ヶ月、五ヶ国八都市(イタリアのベニス・ミラノ・ボローニヤ、スイスのチューリッヒ、オーストリアのウィーン、西ドイツのデュッセルドルフとベルリン、オランダのアムステルダム)を廻り、公演三十五回で観客は約六万人、参加人員は、猿之助団長(知盛・忠信)以下、市川門之助丈(典侍の局)、市川段四郎丈(相模五郎・寛範)、中村児太郎丈(静御前)、中村歌六丈(義経)その他約八十名でした。

今月の団十郎丈以下のアメリカ公演も大盛況と報じられていますが、猿之助歌舞伎のヨーロッパ公演も、初日から千秋楽まで前売りは全部売切れ、当日売りもすぐになくなり、入れない人が沢山出てくる程の大盛況でした。ウィーンとベルリンとアムステルダムでは、市の芸術祭の招待公演であり、特にベルリンでは、アジアの演劇と音楽をテーマとしたので、中国からは京劇・人形劇・音楽が、韓国

理事・事務局長

竹本 綾太夫

とインドとインドネシアからは音楽と舞踊、そして日本からは歌舞伎・現代邦楽・舞踏などが、二ヶ月に亘って催され、特に歌舞伎はこの月間のメインとして八日間演じ、初日には大統領・首相・各大臣が列席するといふ華々しさでありました。又、この初日(六月十二日)は、奇しくも市川猿翁二十三回忌祥月命日に当り、更に四ノ切上演七百回目に当るといふ記念日でもありました。

ともあれ、各国の最大級の賛辞、終演後の十分以上に亘るカーテンコール等、猿之助丈始め端役の一人までも一生懸命熱演した成果が表われ、裏を翼った竹本一同も誠に嬉しく晴々とした気持ちで帰って参りました。珍談・奇談は後日として、私個人としては、ベニスの多様な素晴らしい建築物に接したこと、スイスアルプスのユングフロロー・メンヒ・アイガーに登り神々しい白銀の世界を眺めたこと、ウィーンのドナウ河に遊んだこと、ベルリンでアジア各国の音楽舞踊を鑑賞出来たこと、東ベルリンに入りウンターデンリンデン街を歩いたこと、各国の美術館・博物館で多くの名画を見ることが出来た等、仕事で来ながら観光旅行以上の体験をしたのは誠に幸いでした。齢を感じさせぬ陽気な重松御大、海外初ながら旅なれた時若氏、若手のホープで四ノ切の大役を勤めきった葵太夫君、やはり海外初で大いに頑張った泰二郎君と幹太夫君、どうも御苦労様でした。

女義太夫・竹本小播磨と播千代

特別会員 佐野俊三

「天惣」と小播磨

竹本小播磨（佐野寿恵）は明治二十六年五月四日、東京は本郷三丁目の天婦羅屋「天惣」の三女として生れた。父親・惣七は芸事が好きで、六歳の六月六日に長女の「たか」を清元延寿太夫に、「寿恵」を竹本播路太夫につけ、それぞれ大成することを楽しみに厳しく育てた。当時の天惣は場所がら帝大生（現・東大）やジャーナリストの溜り場ともなり、次女の「そよ」を加えて三人娘が長じて、それなりのお目当てのご最良客もでき天惣は大いに繁盛した。当時の記録で、石川啄木がまだ不遇時代・天惣によく通った縁で真砂町の床屋の二階を紹介されしばらく住みついた時代でもあった。その後、たかは延寿太夫より、延多か寿の名を許され惣七の片腕となって家業と芸道に励んでいる。

寿恵は十三歳のとき、竹本龍と名乗って浅草の東橋亭で初舞台を勤めている。十六歳の時、竹本小播磨の名を許され同じ東橋亭で、看板あげ（真打披露）をした。相三味線は、竹本播志磨、明治四十二年の女義太夫全盛期で堂摺連（ドースル連）が、寄席から寄席へ渡り歩いた時代である。この頃帝大の学生であった、のちの国文学者・金田一京助氏が大

の小播磨ファンで天惣を訪れては、励ましていたようである。特に氏の女性のような軟い声が印象に残っていた、と小播磨が後年になって語っている。惣七は家業を長女の、たかに託して娘小播磨の人気上昇につれて、ひそかに寄席の片隅に座って聴き入る事が多くなつたそうである。悪い虫がついてはいけないうい配慮もあつたようで、自分がどうしても行けないときは、たかの長男（現・嶺南江堂・常務取締役 佐野正司氏）をお目付け役として同行させたほど、溺愛したようである。正司が6、7歳の頃である。こんな話も残っている。寄席がはねてご最良筋から「小播磨さん、ご一緒に食事でも」と誘われると、いつも決って天惣へ案内されてしまうので「たまには監視の届かない処がいいんだが……」と苦笑いされるほど来るご最良も、来るご最良も天惣へ、天惣へと足を運んでもらうたらしい。このように姉妹三人が力を合せて天惣を守ってゆく姿に、惣七も大変喜んでいたようである。大正半ば頃、竹本素雪・鶴澤三平等と肩を並べていた相三味線の播志磨（明治四十四年の東京女義太夫見立鑑の番附による）と、三味線で東の関脇に位置していた）が死去のあと、豊竹巴住が相三味線となっている。



小播磨（20歳）

播志磨

大正十三年の女義番附によると、東の関脇に、竹本小播磨の名が載っている。ちょうど惣七の七回忌に当る頃で故人も地下で満足したことであろう。

小播磨と播千代

大正十一年、本郷真砂町に居をかまえると同時に長男（筆者・嶺サイマック代表取締役）が誕生、夫を早く失ったため乳呑児をかかえて楽屋入りをする事が、しばしばあつたそうだが。天惣はその後、関東大震災でも焼けはしなかつたものの、女手の経営はそう長く続かず、しばらくして廃業した。当時同じ境内

に、藪そば・越勝等の有名店や、三丁目の角に、兼やす等があり、薬師境内には大仏もあり、特に縁日の賑いが印象に残っている。

昭和元年、群馬県利根郡より人を介して小林正子（のちの竹本播千代）が上京、当時十三歳の少女であったが「素質のある子だからぜひ」ということで先は語らせてみたら、ひどい田舎訛の義太夫節なので、いったんは断わろうと思ったが、特に声量があるので思い切って内弟子にすることにしたと語っている。

昭和三年、小播磨の次姉の「そよ」の娘・貞子が播貞として、翌年山形より播光がそれぞれ内弟子として入門、口語りとして厳しい修業に励んでいる。

昭和五年、正子が竹本播千代として東橋亭で看板あげ（真打披露）をおこなったのは彼女が十七歳の時である。同年、J O A K（現NHK）の全国放送で、小播磨・巴住のコンビで得意の「沼津」を語った。その時のアナウンサーが、松内範三氏であったそうだ。当時の東京女義太夫は、竹本素女を筆頭に、伊達子（現・土佐廣、人間国宝）・越駒・素鼻等の人気者が輩出された時期でもあり、小播磨・播千代の師弟コンビも懸命に稽古、稽古の毎日であった。こんな話を聞いたことがある、師弟コンビの稽古がはじまると、隣近所の家ではそっと雨戸を閉めたそうである。それは稽古がはげしくってはじめの内は、どんな声が響いているが、きまってる最後はお互いに泣き乍ら教え、教わったそうで、それが聴くに耐えない、ということらしい。

昭和六年、小播磨は渋谷の金王町に移転しそこから浅草の東橋亭、麻布の十番俱樂部、四ツ谷の喜よしを毎夜のように掛け持ちするほどの忙しさで、この師弟コンビの最も充実した頃である。

東橋亭

昭和七年、播千代の内弟子として同郷の田村よし子（竹本小播、現・筆者妻）を入門させたが、播千代の稽古の方が忙しくて、終るとすぐ寄席へ行ってしまうので、ろくに稽古をつけてもらえなかった、と云っている。

当時はよく楽屋入りに、円タクを使用したりしいが、渋谷から浅草の東橋亭まで値切って三十銭だったとか、また当時の円タクはシボレーの箱型が多く、座席は互に向き合って座るようになっていた。東橋亭は現在の地下鉄銀座線の浅草駅（雷門口）のそばで、狭い路地を入った左側に数本の幟をたてて、木戸番のおじさんが呼び込みをしていた。この寄席は階下が入口で、二階が客席になっていた、入口でチケット（チケットの訛り）を買い下足番のおじさんに下足札を貰うと間髪を入れずに、おじさんが下足札をたゝいて二階に知らせるといふもので、この乾いた木の音がいまでも耳に残っていて懐かしい。

二階には、モギリのお姐さんがいて小さな座布団とたばこ盆を持って案内してくれる。切前あたりになって客が混みはじめる頃、なじみの客が来ると、客席を整理しながら、いつもの定位置に座をつくってくれるというサービスマも心得ている。そこで別に布団の料金

とたばこ盆の料金を支払うが、気のきいた客は別に心付けを包んでくれるとか、「つりはいらぬよ」とか云って、意気のよいところをみせるなど、和気あいあいの風情であった。切前が終り大切の幕が開く前に、中入りがあり、この時間を利用して口上が入る。これは、明日の語り物、それを演ずる太夫・三味線の披露をするわけで、それぞれの口語り（まだ看板をあげない内弟子）が競い合って申し述べたものである。

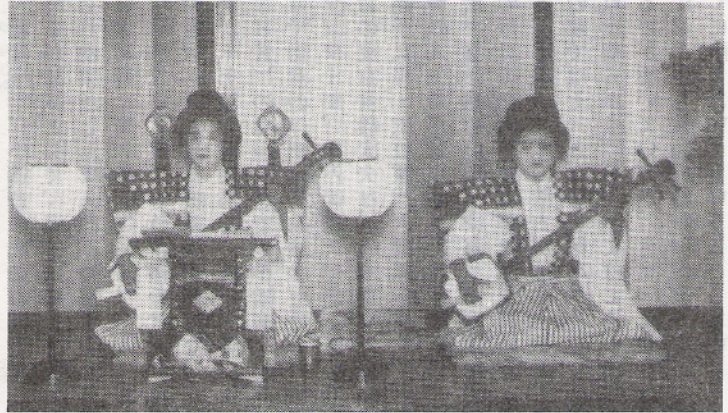
染登・播路太夫・山田家

この頃、小播磨の口ききで、駒場から竹本染登一家が引越して来た。狭い路地を通過はす向いの粋な二階家だった。染登師、おばあさんと一人娘の節子さん、節子さんは髪を三つ編みに結って、いつも裏打ちのある前掛けをしめていた姿を、今でも忘れない。彼女が十八歳ぐらいの頃で、二・二六事件のあった年でした、と話してくれた。

当時、文楽の東京公演があると、竹本播路太夫がしばしば小播磨宅へ立寄っていた。

いつもきまってる、名物の昆布の佃煮を下げて「小播磨はん、おりまっか」と玄関の格子戸を笑顔と共に入って来る。「播路兄さんもお元気で……この度はご苦勞様なことです」

子供心にも、この会話が不思議でならなかった、というのは小播磨には男の兄弟が居ないのに「兄さん、兄さん」といっている。これはあとで判ったことだが、芸界言葉で兄（姉）弟子に対する尊敬の念と信頼をこめた言葉であると、感心したものである。



小播磨

播千代

(本所倶楽部 昭和 15 年)

播千代が人気が出て地方からも声がかかるようになると、当時興業を一手に押えていた山田家も忙しくなり、しばしば小播磨宅を訪れては打合せをしていた。この山田家は俗に「正ちゃん」と呼ばれ、面長の坊主頭で多少ドモリであり、特に暑い日はカンカン帽をかぶっていたことを覚えている。

地方巡業

播千代の二代目襲名の気運がたかまる頃、彼女の生れ故郷・利根郡の薄根村の公民館で

東京女義太夫・竹本小播磨一座の看板として切を勤めた。この当時の地方巡業は「乗り込み」といって前日に宿に入り、その日の内に人力車を連ねて町を練り歩くもので、ふれ太鼓の音を響かせながら、先頭に盛装をした座長の小播磨が乗り、二台目が播千代、以下客演の太夫・三味線方がそれぞれ芸名を染めぬいた幟をたてて、町の大通りをゆっくり行進するもので、箱屋の由さん等が前後でかついだ太鼓に向かって「正ちゃん」が懸命にたいたものである。そして、要所所で「口上」が入り、この日ばかりは「桃割れ姿」の「口語り」でも、太夫さん、太夫さんといわれ、大いに面目をほどこしたものである。ましてや播千代は故郷に錦を飾ったわけで、村長以下の出迎えをうけて両親ともども、得意満面な事であったろう。一日の公演は日暮れ時から夜の十時頃までかかったらしく「地方興行は疲れる」といっていた。もっとも終了すると村長をはじめとして、有力者や愛好家が「待っていました」とばかり一席を設けるので、一座の全員が宴席のお相手をする事になり、時には深夜までおよぶことがあったらしい。

もっとも当時の農村は、いと違って娯楽がとぼしかった事もあり、義太夫を聴いたりできればサワリの一節でも語ればという願望から案外根強い愛好家が多かったらしい。したがって前記のような興行が二日でも三日でも開演されると、親せきの家へとまりがけで聴きに來る人もあったらしい。また、せつかく東京の太夫さんが来てくれているので、

稽古をしてほしい、と昼間から飛び込みがあり、それが有力者や、愛好家だと、どうしても断われなくなり、結局お相手をする、それがまた彼等には自慢の種になるらしく「小播磨さんの糸で語った」「播千代さんのツレ弾きで野崎をちよっと」という具合になるらしい。「お素人さん相手はできるだけ興行中はしない」と云っていたが、余分な実入りともなるので、痛しかゆしといった処か。

こんなこぼれ話もある。多分その人は東京の女義太夫をはじめ見て聴いたのであろう。「あっ、座長様の小播磨ちゅう人は、目があいている」。当時、正子(播千代)が上京する以前の師匠は、目の不自由な人であったと聞いている。その人は義太夫語りは、みんな目の不自由な人のやる事だと思っていたらしい。その背景には五体が満足で、容姿が十人並であれば好き好んで芸人にならなくとも、という当時の時代思想があったのではなからうか。ともあれ、このひと言は都会と地方との認識のズレを如実に物語っていて興味深い。

定席と地方興行以外にも浅草六区の映画館に出演したことがある。まだ本郷に居た頃で、トーキーの波に押されて活弁がいよいよその幕を閉じる頃だったと思う。ちょうど本郷の薬師境内に、天下のファンをわかせた活弁の静田錦波が住んでいた関係で、帝国館で語ったものである。和洋合奏のあい間を縫って、太三味線の音が響く館内は、異様であり子供心にも一種の興奮を覚えたものである。

(以下次号)

日本の音を求めて

豊島区立駒込中学校教諭 及 川 尊 雄

私は、十五年程前から、各地の骨董屋、古道具屋などを回って、和楽器やそれに関する資料の収集を行なっている。その時の様子を書いてみたい。

「お店発見、心うきうき、初対面の店の主人に悪い印象を与えないように、決して無言では店に入らず、『ちょっと見せてください』と断わる。店の中を小さな目でぐるりぐるりと見回す。和楽器発見、お店の人に、この人はこの楽器を買うなと思われぬように、冷静に、冷静に、へーえという顔をし、心の中の高まりを押さえる。そして、その品物から目を離し他の和楽器をさがす。もう一個発見、それは余り良いものではない。しかし、そちらの方が欲しいというような顔をする。骨董屋に出ている和楽器は、その生命が終っているものが多いので修理費がどのくらいかかるかを、すばやく計算する。次に、ほしい方とほしくない方の値段を聞き両方まけさせる。そして、ほしい方の和楽器のみを購入する。場合によっては、更にまけさせ両方を買う」

以上のような戦いの中で収集した和楽器とその付属品は、八百余点、その他に邦楽に関する古文書、資料などが四百余点にもなっ

ている。その資料の中で、三味線類は中国の三弦、沖繩の三線、「近江の焼印入りで『清滝』の銘があり、さわりがなく、沖繩の三線のようにならぬ糸が上駒からはずれていない三味線、十一代近江作の三味線、ゴッタン、左きき三味線、六つ折三味線、太、中、細棹など十数挺がある。義太夫に関しては、吉金親子の駒象牙、骨、ヤッコ撥、見台、譜本などがある。いずれにしても、義太夫で使用される三味線、撥、駒、見台、譜本などはどれ一つを取り上げても、個性的で堂々としており、たいへんたのもしく見えるものばかりである。今後はこれらの資料をいろいろな形で授業に生かしていきたいと考えている。

ところで、以前に中学三年生の鑑賞教材として「三十三間堂」「木やりの段」が教科書に取り入れられていたことがあった。その当時私は東京都教育研究所の依頼で、三十三間堂の研究授業を行なうことになった。その時心がけたことは、現代から古典ということで、当時NHKで人形劇「新八犬伝」が放映されていたが、そのテーマミュージックに太棹（義太夫協会事務局長竹本綾太夫演奏）が使用されていたのでその録画を見せたり、津軽三味線の木田林松栄とジャズコンボの競演のVT

Rを見せたりして、古典と現代の距離をうめるよう努力した。そして実際に義太夫の駒、見台、譜本、三味線などを用意しさわりながら行なう授業も試みてみた。更にまとめとして、「荒城の月」をギター、太棹、中棹で合奏し、生徒の興味を強くひくことに成功したことがある。今後も古典と現代をつなぐ授業をいろいろな形でやっていきたいと考えている。そして私の夢は、「日本の音」「道具」（和楽器）「精神」などをどんどん授業やクラブ活動に取り入れていき、「授業の日本化」を計ることである。そのためには、古典を生そのまま取り入れる方法では生徒はついてこないのではないかと考えている。そしてこれからは、子供の心（気持）をつかむ実践的な授業をいろいろな人々が重ねていく必要性も感じている。

ところで義太夫協会が、義太夫の保存と発展のために、いろいろな困難と戦いながら努力なさっていることに深い感銘を覚えます。その中で、「義太夫教室」での後継者養成、「本牧亭」での演奏、教師のための義太夫節（浄瑠璃）講習会などに、現代作曲家に依頼した作品を取り入れ、現代と古典の融合にも努力してほしいと願っています。いずれにしても大きな仕事だと思えます。「継続は力なり」でがんばってほしいと願っております。

軽薄短小

松橋 正文

よ
齢いを重ねると思いも掛けないことに遭遇して戸惑うことがある。

明治以来、米の自給は不可能というのが常識だったのが、近年の古々米だとか休耕田だとかいう言葉に吃驚してう。蚕を飼い、せっせと生糸を輸出して、陸奥だ長門を作ったのに、今は生糸の輸入国とやら。一体どこの話かと頭を傾けたくなる。「アメリカではコンベアに乗って車が作られてるそうだ」と聞き羨しがったのに、今はあちらをへドモドさせる程輸出をしているとか。

その中で一番魂消るのが、軽薄短小が尊重されるという風潮である。卓上計算器が軽く薄くなることは歓迎すべきことであるが、芸術や処世の態度までこの物差を当てられるのだからたまらない。森鷗外や幸田露伴の文章の迫力や碩学性を論じても歯牙にもかけられない。「そんなマジなのは駄目」と馬鹿にされるのがオチである。

臍曲りに一番軽薄短小ならざるものを探して見た。有った有った!!我が愛好する義太夫がその最たるものである。庶民の間に生れて育くまれたものだけに、政治的社会的の権威こそ欠くものの、その生い立ち、完成過程、演奏者の修業、種々の道具立てから挙措動作に至るまで、軽薄短小の入り込む隙も有らば

こそ、重厚長大そのものである。肩衣袴を着用に及んで、演奏の前後に床本を恭しく頂く。軽薄族に爪の垢でも煎じて吞ませたい荘重さである。祐仙や助平は如何にと問われるかも知れないが、宿屋や岡崎の悲劇を際立たせる作劇上の巧妙な手法であって、迂闊な修業で語れるものでなく、熟練を要すると聞く。

如何に世が末世に及ぶといえども、深遠なものが辱しめられる等というのは、決して永續すべきでなく、はやり病いのような、一過性のものに違いなく、民族のためにもそうでなければならぬ。

物質的に豊かになると、欲しい物が手に入り易くなり、苦勞努力を重ねるのが馬鹿馬鹿しいという風潮を産む。人は易きに就きがちなものである。軽薄短小の素地はたしかにある。この態のお人には、死に物狂いで精進する等は余所の世界のことかも知れない。「二十世紀になって芸術は創造されていない」という言を聞いたことがある。一面の真理である。物質的には頗る豊かになった代りに、芸術的精神的には、貧しくなつて了つたのだ。

この様な風潮の中で、我が協会に集い義太夫を愛する諸兄姉は本当に豊かな恵まれた方々と信じて疑わない。特にお若い技芸員の方々が、白眼視や変り者扱いを歯牙にもかけず、只管技芸の向上に傾倒して居られるのは、本當に立派なこと、尊敬している。聞く都度上達の跡が感じられ、幸せな気分になる。

世の中の誤った風潮に毒されることなく、研鑽を積まれんことを祈る。(特別会員)

資料・記録部から

岡田先生(号・蝶花形)——あゝ、あの背の高い……と思ひ出す人も少くなつてしまいました。『明治大正・女義盛観物語』の著者岡田道一医学博士が逝つて満五年。竹久夢二、河井醉者らと親交があつて、歌をよくし、そして何よりも女流義太夫を愛し続けて毎月のように本牧亭にみえた同博士の御遺族から貴重な資料を御寄贈頂きました。七月七日、資料・記録部が、専門の医学をはじめ歌、旅行等膨大なスクラップ類の中から、義太夫関係のものを頂戴して参りました。稽古本28冊、解説本38冊、他に浄瑠璃関係雑誌、小土佐の色紙、文五郎の手形、盛観物語の直筆原稿等々、只今リストを作製すべく整理中です。



竹本小土佐・直筆



オペラへじょうるり初演に参加して

野澤錦鈴

義太夫三味線の修行を始めてから未だ日の浅い若輩者の私ですが、この五月末から六月にかけてアメリカのセントルイスで初演された日米合作のオペラの中で、オーケストラと共に、アメリカ人太夫の三味線を勤めるといふ、不思議で楽しい体験をして参りました。へじょうるりは、セントルイス歌劇場の第十回シーズン記念委嘱作品で、台本はブリテンのオペラ演出で名高いコリン・グレアムが、近松の作品をヒントに書き下ろし、作曲は、邦楽器の現代化運動を進め、八春琴抄へあだくと、日本の伝統芸能と関連した創作オペラを発表している三木稔。キャストはニューヨークの若手・中堅歌手で、演奏はセントルイス交響楽団。そこに日本から、尺八・箏・太棹の邦楽器奏者三人と、スタッフとして美術衣装の朝倉撰、振付けの尾上菊紫郎が加わり、本格的な日米の協同作業の上に成り立ったものです。

話の筋としては、一七〇〇年頃の大坂を舞台に、人形浄瑠璃一座を率いる盲目の太夫・阿波の少掾と、その若い妻お種、若い人形遣い与助の三人による、義理と人情が絡む恋の葛藤を中心に、最後は、少掾自らの語りによって、お種と与助が道行を演じて心中するという悲劇に終ります。コリンは、日本の古典文学や芸能に造詣が深く、時代考証は驚く程綿密ですし、劇中劇として人形浄瑠璃の場面が設定されている他、劇そのものの中に、歌舞伎の時代物様式、世話物様式、狂言の様式などが、完全に消化して盛り込まれています。言葉の面でも、日本の近世文学からの引用が多くなされ、内容的にも、その精神性、宗教性の高さからいって、現代の日本人以上に日本的であるかもしれません。つまり、単に日本情緒を表面的に摂取した異国趣味的なオペラでは決してないわけで、日本人スタッフによる着物のデザインから着付、振付の徹底した指導によって、最初は正座ひとつ満足にできなかった青い目の歌手たちも、最終的には日本的立居振舞、伝統演劇の様式化した動き迄マスターし、完全に日本人になり切っていました。

音楽は英文台本から作曲され、オーケストラに邦楽器が入ることからもお判りのように、日本の伝統と西洋の伝統のエッセンスをとり入れつつ、作曲者オリジナルの語法によって創作され、随所に美しいアリアがちりばめられています。太棹は、具体的には三幕それぞれに設定されている劇中劇で、少掾の語りの伴奏として用いられました。一・二幕では、舞台の中央で、与助とその弟子が人形を遣い、三幕では、お種と与助の道行が練り広げられる傍ら、舞台の上手で袴をつけて見台を前にした少掾の横で、私は若衆風の髪型で袴をつけて三味線を弾いたわけです。その少掾役の歌手の体の大きいこと、いったら、足が長すぎて、七兵衛も異常に高く、まるで子供の椅子なのです。私は人一倍体が小さい方ですから、お客様からはどのように見えたことでしょうか。

一幕目は時代物「為永の最後」、二幕目は王朝物「たのえ御前の涙」、三幕大詰は、道行「熊野心中」と、外題もそれらしく、文楽人形より少し小型の人形もよくできており、遣い手も、なかなかのものでした。義太夫節そのもの、旋律型は使われませんでした。が、作曲者は古典を学んだ上で、英語の台本が持つ語調やリズムから、独自の方法で新しい語り物風音楽としています。私は、英語の歌詞を聴きとって歌手と息を合せながら、指揮も見てオーケストラと合せるといふ、大変な作業を強いられました。少掾と二人で初めて合せをした時は、全く違和感なくすんなり合ったのに、オケが入った途端に、やりにくくなってしまうました。オケで使われる、持続音を発する西洋楽器群と、音の立ち上りが躁音的で激しく、すぐに音が減衰してしまふ日本の撥弦楽器とは、それぞれが持つ生理が違ふし、私自身、指揮者の棒に慣れていないこともあったし、少掾と指揮者の間で感情的行き違いがあってたりして、私はリハーサルの間中、二人の間に入ってどちらに合せるのか困

ってうろろ往生してました。でも習慣とは恐ろしいもので、義太夫節の修行では、太夫に合せるところを学んできた為、どうしても指揮より少掾に合せてしまいがちで、少掾が少し延びれば私も延ばして、オケとずれるといったことがしょっちゅう起こっていました。そんなこんなも、リハーサルを何回となく重ねていくうちに、初日迄にはなんとかうまく収まりました。日本と違ってアメリカでは、一興行を打つためにどんなにお金と時間を費沢に使うことか。五月三十日が初日で、間をおいて六月二十三日の楽日迄公演は五回、その準備として五月の頭から稽古が始まり、十九日から邦楽器とオケが入って十回リハーサルがあり、歌手の声を休ませるFree dayまで設けられているのです。歌手・指揮者、他のスタッフもニューヨークから呼んで一ヶ月以上拘束し（因に、セントルイスからニューヨーク迄、飛行機で二時間。勿論、売っ子は、公演の間を縫って、他の仕事をしていきます。）オケのメンバーをおさえた上に日本から八人も呼んで一ヶ月以上ホテルに泊めて、ギャラを払うのですから、莫大な経費といえます。日本のオペラでは、それだけの時間的余裕も、経済的余裕もないでしょう。アメリカには、そういう贅沢な芸術活動を支えることができる裕福なスポンサーがいくらでもあるのですから芸術や芸能に対するお国柄の違いを痛感してしまいます。

さて、今回のアメリカ行きは私にとっては何もかもが新しい体験で、楽しいこともあつ

た一方で、同じくらい辛いこともありましたが、どの公演でも、カーテンコールの際、劇場を埋め尽くした約千人のお客様の熱烈な拍手と声援、Standing ovationを体いっぱい受けとめる度に、音楽をやっていたよかったです、三味線を弾いていたよかったですという至上の幸福を感じることができました。舞台を勤める者にとって、お客様の温かい拍手が

『壺をかぶった色事仕』長吉

立花 繭子

浄瑠璃の文句には、昔の庶民の『古典の常識』が織り込まれていて、現代人の『忘れてしまった教科書知識』では、俄かには理解し難い部分があります。お半・長右衛門の『桂川連理柵』帯屋の段、義兵衛親子に証腕の文をつきつけられ、窮地に陥った長右衛門を救った丁稚長吉が入る伴りの文句へ出来合ひの壺をかぶった色事仕もその一つです。

「壺をかぶった」というのは、注釈をつければ「失敗する」という程の意で、この語源は、『徒然草』第五十三段、仁和寺の法師が酒宴の席で興に乗るあまり、鼎かまの壺を頭にかぶって舞い、大いにウケたところが、これが抜けなくなり、医者にも見離され、仁和寺に帰り、枕許で老いた母などが泣き悲しんだ華句、ある者が「命を失うよりましだ」と鼎を力まかせに引いて取り、その結果、耳や鼻が

どれだけ芸の励みになることでしょう。まだまだ考えたこと、感じたこと、たくさんありますが、御報告はこのへんで終りに致します。そして、本当に最後の最後に、どんなに新しいことをやっていく上でも、義太夫節の修行は、益々懸命に続けなくてはいけないなあ！

欠けてしまったが命は助かり、長い間、病に伏せた、という故事にあるそうです。鼎というのは、三本の足のついた器で、物を煮たり沸かしたりするのに用いたもの。

この悲喜劇をもとにした岡本綺堂作『仁和寺の僧』は、最近、松竹新喜劇で四十年ぶりに再演、TVでも放映されましたが、現代人の一般常識には至っていないようです。

そこでこの文句は、へ出来合ひの「一」当分の間に合わせだけの、「色事仕」は御存知の通り、お半に横恋慕の長吉が「長様まるる」の長の字は長吉のことだ」と偽る所から来ているので、「その場のがれにうまく偽ったが、あとで義兵衛親子にいじめられて失敗する長吉」ということになります。

参考 新潮日本古典集70『浄瑠璃集』

二、三年前の本牧亭で「壺をかぶった」の意味をお尋ねになったお客様、門下の繭子が調べましたものが御参考になれば幸いです。

竹本 駒之助

協会の動き

昭和60年5月より
昭和60年8月まで

- 5月20・21日 義太夫協会公演会 於本牧亭
21日 第8期竹本研修・第3期鳴もの研修・第5期寄席囃子研修 合同開講式 竹本研修には6名が合格した。 於国立劇場
- 5月24日 義太夫教室第38期(初級入門コース)開講 42名が受講、オーストラリア女性、イタリヤ男性という異色の受講生が目された。 於銀座三丁目東町会事務所
- 6月5日 昭和61年度補助事業概算予算提出 於東京会館
- 6月7日 芸団協第19回総会 於東京会館
- 6月9日 資料部会 於素丸宅
- 6月12日 常務理事會 於芸団協会議室
- 6月16日 資料部会 於事務局
- 6月20・21日 義太夫協会公演会 於本牧亭
- 6月26日 鶴澤三生師追善浄瑠璃會(三生會主催・大日本素義會後援) 於本牧亭
- 6月27日 義太夫協会昭和六十年年度通常總會昭和59年度事業報告・収支決算報告、監査報告、昭和60年度事業計画・予算案を審議、原案どおり可決した。 於文明堂築地店
- 6月30日 娘義太夫精進の會(鈴木一光氏助成) 於本牧亭
- 7月7日 資料部会 故岡田道一氏宅御寄贈資料ひきとり 於アリス
- 7月12日 公演部会 於アリス
- 7月14日 21世紀の素晴しい子供たちへ……乙女文楽公演(フランス大使館文化部・東京都教育委員会・義太夫協会後援) 於銀座ガスホール
- 7月20日 教師のための義太夫講習會 義太夫節の表現法―時代と世話―教師の参加者84名、会員および一般101名 大盛況であった。 於本牧亭
- 7月21日 義太夫協会公演会 於本牧亭
- 7月22日 新入正会員審査委員會 於新小松
- 7月22日 定例理事會 於新小松
- 7月22日 義太夫教室第38期(初級入門コース)閉講式 皆勤7名、39名が終了した。(14・15頁参照) 於銀座三丁目東町会事務所
- 8月7日 大会企画委員會 於新小松
- 8月10日 資料部会 於事務局
- 8月20日 義太夫協会会報第35号発行

寄贈

- 竹本 染登氏 テープ・プログラム等 多数
- 岡本 文弥氏 隨筆集「谷中寺町・私の四季」 三ヶ
- 豊澤 瑩緑氏 根尾 アガリ糸 多数
- 鶴澤正一郎氏 オープンテープ 多数
- 品川区役所企画広報課 土佐広・寛八「唄山姥」ビデオ 一ヶ
- 西本 敬郎氏 義太夫長袋 一ヶ
- 池田 弘一氏 本牧亭六月公演にあたり「戻橋」の解説と詞章 配布
- (併せて戻橋に関する写真を展示して下さいました。)
- 豊澤 仙鳳氏 指ズリ・指かけ 多数
- 品川 欣司氏 SP用レコード針 一箱
- 故岡田道一博士御遺族様 女義資料 多数
- (10頁参照)
- 佐野 俊三様 女流義太夫写真 七枚

竹本越友師 引退を表明

「私儀 永年義太夫を通じて皆様の御声援、御愛情をいただき今日に至りました。深く感謝致し居ります。玆三年余病気の為疎遠引き籠りおりましたが、とても再起不能と考え引退する決心を致しました」 中部で活躍された竹本越友師の引退披露演奏會が、6月28・29両日、名古屋市西区役所講堂にて行われました。今後は健康に留意され、後進育成のため御尽力下さいますように。



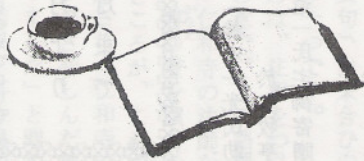
義太夫教室第 38 期

受講生はこんな人たち

義太夫教室第 38 期生は 40 名の定員をはるかに越える応募者で、ギュー詰めの会場でスタートしました。応募者のうち 2 名は、「竹本講習」の一次試験に合格したため受講しませんでした。脱落者も少く、実にまとまったクラスとなりました。7 月 22 日、閉講式の後片づけを済ませて表へ出たら、闇の中に去りがたい風情の生徒さん集団が印象的でした。自発的にレコード鑑賞会を開く計画もあるとか、今年の受講生はこんな人たちです。

* 長唄初心者 * 寄席の下座三味線に興味があります。落語のことを話し出したら止まりません。* 会社員、説教節に興味があります。* 芸能史に興味あり。観劇（歌舞伎中心）、映画鑑賞、音楽鑑賞が趣味です。* 元祿歌舞伎研究、* フリーの翻訳家ですが、今勤めの口を探しています。B・F も探しています。よろしく、バイオリンをやりましたので、今回は三味線にトライします。* オーストラリア人、けれどもアメリカカのミシガン大学の博士論文（テーマは女流義太夫）のため日本にいます。専門は邦楽、お琴、また民族音楽学 * 語り物（新内）に興味があります。小唄、琴曲を習っています。* 小唄・哥澤 *

専攻は中国語、現在研究室の雑用人をしており、秋からは出稼ぎにゆく予定です。この教室は私の生きがい。* 早稲田大学演劇博物館助手、ご用の際はご連絡を！ * 新内 * 長唄です。* 一番前の右側が指定席 * 専攻が近世文学で、というより歌舞伎が大好きで研究会に属しています。好きな役者は歌右衛門さんです。* 謡曲 * 東京芸術大学薬理科 3 年在学中。目下、大学の副科で長唄三味線と生田流箏曲を習っています。（全くの初心者）卒論で長唄をとりあげる予定です。* 短大の歌舞研の部長☆です。私は田舎芝居の女形をやリ、義太夫をうなり歩いて店をつぶした御先祖の血をひいてマス。玉三郎メンバーズクラブの会員です♡ * 三味線の音にひかれてウン十年と少ーし。古典物勉強したいな！ * 育児業 * へばえかきの幼虫です。仕事ください。* 視力 0.1 もなし。コンタクト嫌いでメガネだけ。* 地唄初心者 * 早稲田大学院文学研究科、演劇研究室（以上受講生住所録より）



* 年輩の方が多いだらうと思っていましたが若い人ばかり、そして女性が多く、外国の方が二人もいることに驚きました。

* 緊張の二ヶ月間でした。

* 私がなぜ受講したかといいますが、歌舞伎をもっと知りたためでした。ですから最初イメージが違って戸惑いました。生れて初めて本牧亭へも行きました。素浄瑠璃も面白いなと思ひ始めています。土佐廣さんは素晴しかった、女の人の声とは思えませんでした。

* 苦しかったことは、駒之助先生に全員が少しづつ一人で語らせられたこと。大変でしたが良い経験でした。

* こういう目まぐるしい時勢には、はっきり申して義太夫は生きにくからうと思ひます。初めて触った三味線の重たさや、特に重造さんのお稽古など、決して忘れ去ってしまわないようにと心に思っているところでです。* 机の上の勉強だけでなく実際にやってみたことで歌舞伎に対する接し方が多少変化したように思えます。

* もっと早く義太夫教室の存在を知っていたらと悔やまれます。演劇界講読も歌舞伎座、文楽通いも欠かさなかったのに、去年まで気付かずにおりました。

* 思い切り声を出すことが出来て気持ちよかったです。義太夫が好きになりました。

* 義太夫協会の力の入れ方が伝わってき、より一層の発展を願います。そのために宜伝を。

*今までは、ただ何となく好きで聞いていた義太夫ですが、これで少しは「良い観客」になれそうです。

*日本の芸能の現状や進むべき方向についてそれぞれの先生方のお話をもう少し突っ込んで伺いたかった。

*三味線が大変というのは知っておりましたが、あれほど疲れるとは露知らず、よい体験でした。

*友人にもこの教室をどんどん宣伝します。
*語りの魅力は素晴らしいものだと感激しました。自分なりに登場人物になりきって、もう少し語りを勉強したいと思います。

(以上アンケートより)

義太夫教室 O B 会

昨年10月、本牧亭で開いたOB会は、時間の都合で比較的近年のOBのみの出演でしたが、大変な盛り上りを見せました。義太夫教室は例年、卒業公演として「東横・名韻会学生大会」(三月末日)に出演していましたが会場の東横ホールが7月14日、遂に閉ざされましたので、現38期生の卒業公演も兼ねて次のとおりOB会を行うことになりました。詳細は未定ですが、関係者各位、特に出演希望の方は早目に御予定下さい。

記

*昭和61年2月11日(火)建国記念の日

*本牧亭 (昼・夜)



特別会員

昭和59年度会費

— 2口以上の方 —

池田 弘一氏	4口	20,000円
石川 団三氏	2口	10,000円
稲垣 元宣氏	2口	10,000円
内野アキコ氏	6口	30,000円
景山 正隆氏	2口	10,000円
加藤 道子氏	2口	10,000円
品川 欣司氏	2口	10,000円
菅 邦夫氏	6口	30,000円
鈴木 一光氏	2口	10,000円
高野 俊雄氏	2口	10,000円
中島 古平氏	2口	10,000円
松尾 武市氏	2口	10,000円
森 寿美氏	2口	10,000円
和田 博氏	3口	15,000円

特別の御支援、誠に有難うございます。
ひき続き御後援下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

会員の便り

漱石の「三四郎」に曰ク
『小さんは天才である。あんな芸術家は滅多に出るものぢやない。何時でも聞けると思ふから安っぽい感じがして、甚だ気の毒だ。実は彼と時を同じうして生きてゐる我々は、大変な仕合せである。今から少し前に生れても小さんは聞けない。少し後れても同様だ。』

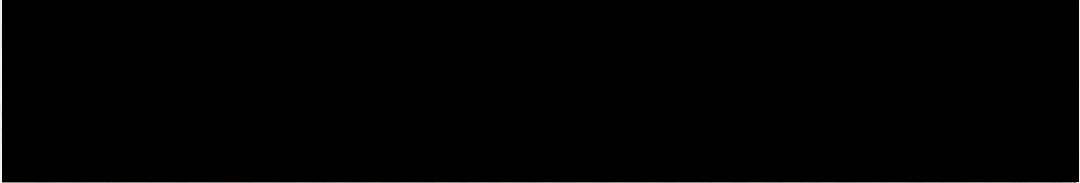
小生、四月二十一日の土佐廣師の「油屋」を聴いて、土佐廣師と時を同じうしている仕合せを正に実感、そこで拙文を書いたため次第。実は少々体調をくずし、ましてや出かけるにくい日曜日とあって、

一瞬迷ったのだが——サボらなくてよかった。あの晩は、初恋の人に出会ったようなホクホク、じんわりした気分、足どりも軽く帰宅。この喜びを他へはやるまじと傾けた酒の美味かったこと。

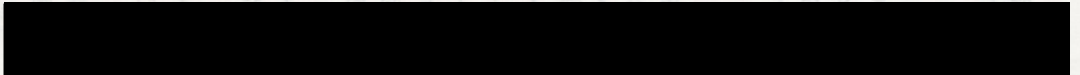
この感激こそ、重要無形文化財から貰った無形の土産。あのいきいきした登場人物がいまだに耳に残っているから、録音などは無用、あの晩、本牧で土佐廣師を聴いた七・八十人だけが共有する無形の財産だ。これだから本牧通いは止められない。土佐廣師の御健康と、益々の活躍を祈るや切。

(本牧ファン)

***** 新入会員御紹介 *****



***** 住所変更 *****



祖先祭御案内

東京の義太夫関係者は、初代竹本義太夫はじめ諸先輩方の功績に感謝する意味で、毎年一回「祖先祭」を行っております。昨年、義太夫節三百年記念にあたり会員の皆様と御一諸に祖先の御供養をさせて頂き、参加者一同、洗われたような気持ちになりましたことは、第33号の会報に詳しく記載されているとおりです。

本年も左の要領にてとり行いますので会員の皆様、どうぞお誘い合せ御参加下さいますよう御案内申し上げます。

記

日時 昭和60年10月10日(木・体育の日)
午前11時〜午後2時

会場 両国回向院 電(六三四)七七七六
(総武線両国駅前 日大講堂隣り)

内容 * 本堂にて読経

* 初代竹本義太夫墓参

* 座敷にて昼食・懇親会

参加費 一、〇〇〇円

申込み 九月末日までに事務局へお申込み下さい。

訃報

■野澤市造師(正会員) 60年6月4日逝去

歌舞伎義太夫一三味線 享年七十五歳

■豊竹和佐太夫師(正会員) 60年7月11日逝去

歌舞伎義太夫一太夫 享年八十八歳

一月には鶴澤英治師が、そして、このたび市造師、和佐太夫師と、永年竹本(歌舞伎義太夫)界に尽くされた方が相ついで亡くなり誠に残念です。

御冥福を心からお祈り申し上げます。

編集後記

残暑お見舞申し上げます。編集中の今は、連日うだるような暑さですが、この会報がお手元に届く頃には、朝晩は涼風が立つのでしょうか。

35号は16頁、"記念品の当るクイズ"もあって、夏休み増大号といったところ、創刊の頃はわずか8頁だったとは思えない程です。

創刊といえば、最近バックナンバーをとおっしゃる方が増えました。欠版も多いので、その時にはコピーが俥力を発揮する訳ですが、先日

も事務所の手伝いに来てくれたAさんが、汗びっしょりでコピーにかかりきりでした。

今後バックナンバーを御希望の方には、誠に恐れ入りますが、コピーの分だけ一枚10円の使用紙代を御負担頂けると有難いと存じます。

それにしても各号揃えて下さるといってお気持は有難く、半徹夜の寝不足も何のその、編集冥利につきるといふものです。

来年1月27日(月)国立劇場演芸場にて大会を開きます。どうぞ御予定下さい。